

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院	実施機関名・連携機関名 福島大学大学院教職実践研究科 (教職大学院)
等コラボ研修プログラ	事業名：学び続ける教師コミュニティ：学校改善リーダーシップ研修 2023～授業改善から学校改善～
ム支援事業報告書	研修等名：【NITS・福島大学コラボ研修】 主タイトル：学び続ける教師コミュニティ 副タイトル：学校改善リーダーシップ研修 2023～授業改善から学校改善～
	開催日時：令和7月8日(土) 9:30～16:00 開催場所：福島大学 L1・M3 教室、オンライン (ZOOM) (福島県福島市金谷川1番地) 参加人数 (総数) と参加者の属性：(62人) 教員11人、学校管理職23人、行政職5人、大学院生9人、研究者12人、その他2人

内容：

1. パネルディスカッション (パネラーによる発表と議論)

① 「福島の『学びの変革』の推進に向けた学校づくり」 小野町立小野中学校長 富岡 泰成 先生

「学びの変革」として「授業を中心に据えた学びの変革」の実現を挙げ、道徳教育推進校の実践、授業等での ICT の積極的な活用や ICT を活用した不登校等の生徒の学びの保障の取組、学力調査の結果を活用したエビデンスに基づく授業改善など、県の施策と関連した発表があった。また、「学校の在り方の変革」として「多様性を力に変える学校の変革」として生徒参画による校則の見直し、「魅力ある学校の変革」としてコミュニティスクールの取組等についての発表があった。(写真 1)



② 「一教員視点からの学校組織マネジメント」福島県立ふたば未来学園高等学校 教諭 鈴木 貴人 先生

ふたば未来学園中・高等学校は、東日本大震災後、「双葉郡・日本・世界の未来に貢献する人材の育成」などを目的に、中高一貫校として開校した。生徒の多様化や教員の現状等の変化を踏まえ、協働的な教員間の学びについての提案があった。研修を巡る価値の転換や校内研修の機能不全などの課題も考慮し、授業を介した改善として生徒による授業評価を活用した指導と評価の一体化やそれをもとにした教員間の対話による研修等についての発表があった。(写真 2)



③ 「授業づくりで学校をつくる」須賀川市立第一小学校長 菅野 哲哉 先生

協働的な学びによる授業に挑戦し、授業と授業研究を第一優先にした学校づくりについての発表であった。「協働的な学び」による授業とは、一人残らずの子どもの学びを保障する授業システムであり、友達と支え合いながら探究的に学び、新たな価値を獲得する授業システムである。具体的には①授業は最初からグループ (男女市松) かペア②子どもを夢中にさせる課題の質と時間配分③日常の挑戦を続けるということであった。成果として児童の学力向上や登校しづり、けが、いじめ報告の減少や教員の変容 (授業観や子どもの姿の変容への喜び) などの具体的な発表があった。(写真 3)



④ 「T・T60年、築山小学校における研究と経営の一体化と学校間連携」

元秋田市立築山小学校長 濱田 眞 先生

1963年からT・Tを60年間継続できた秘訣は、研究と経営の一体化として「研究主任と校長の協働」「教師同士の協働」「過去と未来の教師との協働(学習室を中心に過去の授業実践知が、活用され、次世代へと継承される)」や、個別習得型T・Tを協働探究型T・Tへと変容させてきたこと、と説明があった。さらに、秋田の教師たちは、授業力向上に①同僚との対話②校内研修③管理職の指導が役立ったと評価していることや、中学校区を基本単位として秋田市全ての教師による「全市一斉授業研究会」などの学校間連携によるT・Tの新展開などについての発表があった。(写真 4)



発表後は「学校組織の現状等をふまえた日常的な授業改善を通しての人材育成と学校改善」について議論した。校内研究に関する価値が多様化する中、学校における人材育成もふまえ、個業・分業から協業のための教員同士の対話を生み出すためのシステムの確立や共感・情報収集、文化的台本の共有、外部の支援獲得などの校長のマネジメントの重要性等について提言があった。

2 基調講演

「学校の組織力と教師のエンパワーメント」 筑波大学 人間系(教育学域) 教授 浜田 博文先生 (写真5)

数多くの変革を迫る動きを踏まえつつ、自身の学校にとって必要な改革を考え、各々の立場で学校をどうリードするか。「リーダーシップ」や「組織」「組織力」の概念、「組織としての学校」がもつ力、「学校という組織の特徴」などについてもふれながら、各学校における自律性と協働性がこれまで以上に必要であることを、パネラーの発表とも関連させながらお話された。現代的な学校の課題に対応するためには、多様な「個」による「協働」が不可欠であり、学校が目指すべきビジョンを共有しつつ、各自の個性・特長を生かした教育実践を創造することのできる学校組織が重要。その学校で一番大事にしなければならない価値の共有（共有ビジョン）には、授業を通じたコミュニケーションが必要であり、そのために学校組織は「ウェブ（クモの巣）型」であり、その中で教師がエンパワーメントされていくことが重要であるというお話であった。



成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

アンケート結果（35件）は、参加して「大変よかった」74.3%、「良かった」25.7%、との高評価を得た。職種や立場、校種などを超えた62名の皆様の参加があり、「パネルディスカッションや基調講演の内容をもとに、グループで話し合う時間があり、とても良い」というご意見もいただくなど、内容についてはご満足いただけたようである。以下が主な自由記述である。

- ・ 画面共有や事前に資料の提供をしていただいたことでスムーズに研修ができた。また、聴くだけではなくパネルディスカッションや基調講演の内容をもとに、グループディスカッションで対話の場があり、自分の課題の整理や他の方からのアイデアをいただけたことがとても良かった。
- ・ 校種や職などが異なる、県内各地区の先生方から様々な実践を聞くことができ、大変参考になった。それぞれの先生方が事例だけでなく、体系的な話もしてくださったので、とても勉強になった。また、グループディスカッションが盛り上がり、非常に有意義な研修となった。
- ・ 高等学校においても新学習指導要領に示された「指導と評価の一体化」により、教師一人ひとりが生徒の学習成果を的確に捉え、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図ることが求められるとともに、学校全体で教育活動の質の向上を図ることが求められており、学校組織として取り組まなければならない課題である。この課題解決に向けた貴重な知見を今回の研修で得ることができた。
- ・ 福島県の学校改善の流れを大きく力強いものにするためには管理職向けの研修だけでなく、幅広く興味関心を持つ教職員に対して具体的な支援策を示していくことが重要であると感じた。特に一教員が進める上では教職員同士のネットワークを介した情報共有や励まし合う関係性が非常に重要になっていく。管理職によるエンパワーメントにより、一教職員がアクティブラーナーとして少しでも授業改善や学校改善に取り組む事例が増えていくことが、真に福島の子どもたちにとって必要なことであると考えた。

アイデアや工夫したこと：

- 今回は、パネルディスカッション、基調講演、グループディスカッションの流れとした。基調講演の中で、パネラーの先生方の発表内容に関してのコメントもいただき、その後、パネルディスカッションや基調講演の内容をもとにしたグループディスカッションにより参加者が様々な立場の皆様との対話を通して省察できるようにした。
- 今回も遠くからの参加者はオンラインの希望があり、ハイフレックス型とした。前回の音声等の課題を解消するため機材を準備し実施した。対面47名、オンライン15名の参加であったが、音声もクリアで好評だった。
- 様々な立場の方々の参加していただくため、県教育委員会を通じた各学校への周知、大学HPや授業を通しての情報提供、学校を訪問しての案内、修了生への案内なども行った。今後は日本教職大学院協会等を通して、広く県外へも参加を呼びかけていきたい。

<写真・図など>

<パネルディスカッション>



<グループディスカッションの様子>

